

バークリの視覚の哲学

栗 田 充 治

(一)

プラトンが視覚を「事物を判別する能力」と定義したように、視覚は長い間、五感のうち「もっとも普遍的でもっとも高貴な」(デカルト)感覚として、つまり、外的世界についての知識を我々にもたらすもっとも頼りになる感覚として考えられてきた。十七世紀に精密なレンズが作られるようになると、それを組み合せた各種の眼鏡、望遠鏡、顕微鏡、凹凸面鏡が工夫され、我々の視覚的世界像は一挙にそれまでとは比べものにならないほど豊かで深遠な自然を垣間見させうるものとなる。それとともに、デカルトの『方法序説』に付けられた三試論の一つ『屈折光学』(一六三七)をはじめとして、バロー『光学講義』(一六六九)、マールブランシュ『真理の探究』(一六七五。この第一巻は視覚論を扱う)、プリッグス『視覚新論』(一六八二)、モリヌークス『屈折光学』(一六九二)、ロック『人間知性論』第二版(一六九四。この第二巻第九章がモリヌークス問題を扱う)、ニュートン『光学』(一七〇四)などが続々とあらわれてくるのである。デフォーはこの時代をひやかし半分に次のように評した。「一つの世代が登場した。彼らは超自然的体系の

諸困難を解決するために、一つの強力で巨大なあるもの、肉体はもたぬが彼らにとつては一つの巨大な眼として思い浮べられるものを想像する。この無限の眼を彼らは能産的自然だと想像する。人間の魂はそれゆえ彼ら自然観察者の意見によると、一つの巨大な視覚能力である。⁽¹⁾ (Consolidator, 1705) そして、視覚論を求めるこうした時代状況があったからこそ、若く(二十四歳)無名のアイルランド人僧位研究員バークリは、『視覚新論』(二七〇九)を最初の著作として発表したのであり、この『新論』はその年のうちに版を重ねるほどの反響を呼んだのである。

「眼の世紀」として始まった十八世紀は、視覚論(知覚論)としての心理学を介して認識論という新しい問題領域を開拓する。そしてこの時代の心理学的認識論がつねにそこに立ち返った「普遍的で基本的な理論問題」こそモリヌクス問題にほかならない。⁽²⁾ これはモリヌクスがロックに提起した問題で、「生まれつきの盲人が今は成人して、同じ金属のほぼ同じ大きさの立方体と球体を触覚で区別することを教わり、それぞれに触れるとき、どちらが立方体で、どちらが球体かを告げるようになったとしよう。それから、テーブルの上に立方体と球体を置いて、盲人が見えるようになったとしよう。問い。盲人は見える今、触れる前に視覚で区別でき、どちらが球体で、どちらが立方体かと言えるか⁽³⁾」という問題である。『人知原理論』(一七一〇)と『新論』を準備する段階でバークリの頭を離れることのない⁽³⁾ かった問題がこの問題であったことは、彼の『哲学的評註』(二七〇六—八)のなかに多くの証拠を見出すことができる。

ロックはモリヌクスの否定の答を支持するが、バークリは結論は同じながら、両者が結論を導き出すやり方には大きな不満を感じた。というのは、モリヌクスの解答の根拠は、この盲人が「触覚をかくかくに感発するものは視覚をかくかくに感発しなければならぬ」という経験、すなわち、手を不平均に押す立方体の尖った角は、目に

立方体の尖った角の現われ方をしようという経験⁽⁴⁾を得るに至っていないということだが、この説明の仕方は、触覚と視覚の間に必然的な対応関係があること、さらに「立方体の尖った角」という同一の事物が触覚と視覚に作用を及ぼすのだということの二つを暗黙の前提としているからである。つまり、もしこの前提が正しいものだとすると、触覚と視覚の間の相違は、単に同一の角や同一の方形面が双方の感官に作用する仕方と状況だけの相違でしかなく、角や方形面は双方にとってあくまで同一のものでありつづけることになるので、触覚経験による角や方形面の昔馴染の知覚は、はじめての視覚経験による角や方形面の新たな知覚と直ちに結びつくはずである⁽⁵⁾。ロックとモリヌークスは間違った前提から正しい答を推論したことになる。バークリにとってこのことは見過すことのできない重要な意味をもった。というのは、当時の数学者や哲学者の間で優勢であった見解は、視覚と触覚の双方に共通な観念があるという見解であり、これは視覚と触覚が同一の事物の作用を受けるといふ考え方に密接に連絡した見解であって、バークリの見方では、この見解から第一次性質と第二次性質の区別が由来するからである⁽⁶⁾。視覚の観念と触覚の観念の「異質性」heterogeneityの主張はバークリの視覚論の柱石であり、そしてその議論の発端はモリヌークス問題であった⁽⁷⁾。

一七二八年にチゼルデンが行った先天盲の少年の開眼手術実験はバークリの理論的予見を実証した。ヴォルテールは『ニュートン哲学の原理』(二七三八)でこの実験とバークリの理論を紹介したが、その紹介にもとづいて、コンディヤックは『人知起源論』(一七四六)のなかでモリヌークス問題の新たな考察を試みた。これに対して彼の友人デイドロは、『盲人に関する手紙』(一七四九)のなかでコンディヤックの意識主義を暗に批判し、コンディヤックはこの批判を受け入れて『感覚論』(一七五四)を書いた。モリヌークス問題をめぐらした英国―大陸間の論議を比較検討することは、それ自身で一つのまとまった仕事となる魅力あるテーマであるが、それは別の機会にゆずるとして、⁽⁸⁾

ここではもっぱらバークリの視覚論に焦点をあてて、彼の議論の基本的特徴をつかむことを主眼にしよう。

(一)

一七三三年に発表された『視覚論弁明』によると、『新論』は、当時の光学者たちによって一般に受け入れられてはいるが、厳密な意味では正しくない多くの事柄を真実と認めることから出発している (T.V.V. §35)。それに比べて『弁明』は、結論から視覚現象の解明を演繹しようとするもので (T.V.V. §38)、『その意味で、バークリの視覚論を理解するうえで注目すべき文献である。』⁽⁹⁾ そのなかでも特に注目したいのは、視覚論に関する三つの学問領域の次のような区別である。

「いかにして人間精神は見えているように simply 見るのか、を説明することは哲学に属する事柄である。一定の線上を動く粒子や、屈折し反射し交又して角度をもつに至る光線を考察することは全然別の事柄で、これは幾何学に属する。視覚を眼のメカニズムによって説明することは第三の事柄で、これは解剖学や実験医学に属する。」 (T.V.V. §43, cf. §37)

この区別は、バークリにとっては、まず何よりもキリスト教を当時流行の自然宗教的変質から守るといふ根本的な意図と結びついたものではあったが、こうした形で視覚の現象学 (哲学) と他の科学を原理的に区別したことは、科学の本質や科学的概念の性格を明確にするうえで有利な地点にバークリを立たせることになる。⁽¹⁰⁾ また同時にこの区別は、視覚の観念をもたらす外的原因、すなわち外部に独立に存在する実体の考察を視覚論から除外させるものでもあ

った。たとえばデカルトは、「感覚するためには対象から脳まで送られてくるならかの形像を魂イデーが考える必要がある」というような考え方や、対象とその形像が類似しているはずだと考える態度を批判して、感覚論にとっては、「その形像がそれ自体として対象とどのように似ているかということとはまったく問題ではないことに注意しなければならぬ⁽¹¹⁾」と述べたが、他方で彼は、視覚の場合、網膜像が我々にそれが関係をもつ対象の視像を与えるのは、対象との類似性を手段としてではないが、それでもこの網膜像は「その源である対象とのわずかな類似はとどめて⁽¹²⁾」と言っている。ルースはバークリの視覚論が依拠した二人の権威者として、モリヌクスとマールブランシュをあげているが、両者ともにデカルトに多くのものを負っており、また『新論』第二版にのみ付けられた附録はデカルトに（批判的だが）直接言及している。その意味では、バークリはデカルトの感覚論における注意を彼なりに継承し、それをさらに徹底していこうとしていると思われる。

バークリは言う。「恐らくは、視覚の観念を引起すのと同じの〈存在〉が、同様に、触覚の観念ばかりでなく、他のすべての感覚の観念をもさまざまに引起すのであろうと私も思うのであるが、しかしこのことは（視覚論の）目的にとつては関係ないことである。」(T.V.V. §29) 「外部に存在する存在、実体、力能といったものは、なるほど、なにか他の学問についての議論にかかわることがありうるし、そこでは探究の主題にもなりうるが、しかし視覚論においては、それらのものがなぜ視覚能力の対象として考えられねばならないのか、私には見当もつかない。」(T.V.V. §19) というのは、外的原因について我々がなにかを知ろうと知るまいと、「視覚現象はその本性を変えないし、我々の（視覚の）観念は同じままである」ので、「私が原因について誤った概念をもっていたとしても、また私が原因の本性についてまったく無知であったとしても、そのことは私が私の（視覚の）観念について正しく確実な判断を下す

ことをなら妨げない」(T.V.V. §20) からである。バークリにとって、観念とは感覚の直接の対象であるが、観念の原因(外的原因)は感覚の対象ではありえず、それは、その結果たる観念から理性が推論するものでしかない。だから、視覚の観念はその原因たる外的対象と**わずか**でも似ることはない(T.V.V. §11)。したがって、デカルト＝バークリの視覚論の問題構造においては、たとえば河野氏がモリヌークス問題の妥当な解決方向として示している、「**同一の事物が同一の主体**によって反映されるから」⁽¹⁴⁾という考え方は、少なくともその前段に関しては、問題は振り出しに戻るだけと思われる。

なぜ見えているように見えるのか、という問いは古くて新しい問いである。月の錯視現象(地平線近くの月が天頂よりも大きく見える現象)は古代ギリシア以来さまざまな説明を与えられてきたが、今もって決着のつかない問題である。ここ百年あまりの間の心理学のめざましい発展にもかかわらず、なぜ我々の視覚現象はそのようなものであるのかという問いはまだ多くの謎を残している。ラッセルの言うように、恐らくその問いには「電磁波がラジオによって音に変えられる場合より以上の神秘は存在しない」⁽¹⁵⁾と考えるのが適切であると思われるが、しかしそれと同時に、デカルトが「感覚するのは魂であって身体ではない」⁽¹⁶⁾と言い、バークリが「眼、すなわちより真実に語れば精神」(N.T.V. §36)と**言うように**、この問いは、カントの究極的な問い「人間とはなにか」に通じる深さをもった問いであり、その意味では、バークリが生理学的心理学や幾何学的光学から区別して、「精神の働きとして考えられるべき視覚の真の本性を我々に理解させる考察」(T.V.V. §43)であると位置づけた「視覚の哲学」は、今日なお必要であると思われる。

(三)

『新論』は距離の視知覚の問題をもっとも重視しているが、『弁明』は網膜像の逆転問題⁽¹⁷⁾を視覚論にとって決定的な意味をもつ問題と考えている。そこで我々は、この二つの問題に即してバークリの視覚の哲学を検討していこう。

距離の視知覚の問題についてデカルトは一つのモデルとなる説明を『屈折光学』で与えた。それによると我々は次の四つの方法によって距離の視知覚を得る。(一)「眼球の形」の変化によって。つまり、対象の遠近によってそれを見る我々の眼球の形が変化し、その変化が「自然によって定められた仕方で」、しかも「それについて反省することなく」我々の「脳のある部分をも変化させる」ことによって。(二)両眼相互の関係によって。つまり、対象と両眼の間に形成されると想定される、両眼の隔たりを底辺とする三角形をもとにして、我々は、「自然的に与えられた幾何学によるかのごとく」、「測量師のするのとまったくよく似た推論」を行う。(三)視像の「判明さ、あるいは混乱、また(対象からくる)光の強弱」によって。(四)視像の大きさ、「形および色の違い」、対象の周囲にある事物(の視像)の状態⁽¹⁸⁾によって。

バークリは右の四つの方法のうち、(一)、(三)、(四)は支持するものの、(二)を断固として否定する。彼は光学の領域において直進する光線やその角度による幾何学が用いられることにはなにも反対しないが、デカルトの説明するような「一種の生得的幾何学の知識」によって我々が距離の視知覚を得るといふ考え方に反対するのである(N.T.V. An Appendix)。ところで、デカルトは錯視現象に十分留意しており、「距離を知るためのすべての手段がきわめて不確か

だということ」に我々の注意を促している。⁽¹⁹⁾たとえば、距離の視知覚を得るうえで比較的確かな手段となる(一)と(二)についても、前者は対象が眼から五歩以上離れるともう効力を失うし、後者も「かなり離れたもの」⁽²⁰⁾を見るときには役に立たない。したがってデカルトは、「われわれの共通感覚自体、約百歩または二百歩以上の大きな距離についての観念をもちうるとは思われない」(同前)と結論するのである。この結論から先に進む道はいくつかに別れている。たとえば「マールブランシュは、すべての視覚が誤り易く信頼のおけないものだと考えていく道をとろうとするが、パクリは、マールブランシュに多くのものを負いながらも、彼とは正反対の道をとろうとする。知覚はそれほど千変万化する頼りないものなのだろうか。むしろ視知覚は、なるほど測量師的な精確さほちえないにしても、我々がこの世界で大過なく活動していける程度には頼りになる情報を与えてくれるのではないだろうか。⁽²¹⁾分節言語をもたぬ猿、それゆえ概念的思考のレベルに達していないと思われる猿は、いかにしてかくも正確に枝と枝との距離を知覚するのであるか。⁽²²⁾

前述の通り、『新論』は「距離はおのずからでは、かつ直接には見られることはできない」(N.T.V. §2) という当時の通説⁽²⁴⁾から出発して次のように議論を進めていく。

「精神がある観念を知覚するとき、それを直接、おのずから知覚するのでないならば、それをなにか他の観念を媒介として知覚するのではなければならない。」(N.T.V. §9) そして「おのずから知覚されない観念は他の観念を知覚する手段になりえない」(N.T.V. §10) がゆえに、「距離は、見る vision という行為においてそれ自身直接に知覚されるなにか他の観念を媒介として視界 view にもたらされる。」(N.T.V. §11) だからパクリは、「距離はやはり見える

もの sight によって知覚される」(同前)と考えていることになる。したがって眼によって知覚される対象は、厳密に言うると、二種類あるのであって、第一次の直接的な対象は「明るさと色調」及びその大小、判明度、混乱度であり、第二次の、前者の媒介によって知られる間接的な対象は、今の場合、我々から離れたところにあるものとしての対象である(N.T.V. §50)。バークリは、これらのうち後者のほうが、前者より我々にもっと強く働きかけ、我々によってもはるかに多く顧慮されるものであり、また両者の結びつきは、観念と言葉の結びつきよりもずっと緊密である、と考えている(N.T.V. §51)。だからバークリの視覚論の主題は、眼の第一次の対象がいかにして第二次の対象を我々の精神にもたらしめるのか、その媒介の仕方、両者の緊密な結びつきのあるあり方(両者の関係は類似的か、必然的か、幾何学的に推理されるものか、偶然的か)をどう考えるか、ということである。これらの問題に答える理論こそ、バークリの視覚論の独自性を特徴づけるものであるが、それは知覚の暗示理論、あるいは換言すれば、視覚の符号理論である。『新論』の「新しさ」とはじつはこの理論の新しさであり、それはバークリにとっては同時に、「視覚は自然の創作者(神)の言語である」(N.T.V. §147, T.V.V. §38) という形で神の存在を単純明快に証明する議論の新しさでもある(T.V.V. §8)。

バークリは言う。「ある観念が精神に対して他の観念を暗示 suggest できるためには、それら二つの観念が一緒に経過することが観察されているだけで十分であり、両者の共存の必然性を論証することも、また両者の共存の原因を知ることにすら必要ない。」(N.T.V. §25) 同様に『弁明』は、結論からの演繹の冒頭を次の考察で始めている。「他の観念と結びつけられたものとして観察される観念は符号 signs と見なされるようになり、感覚によって実際に知覚されない事物でも、その符号(としての観念)を媒介として想像力へ知らされる、すなわち暗示される。……(言葉の)

音が他の事物を暗示するように文字は音を暗示する。一般に符号はすべて意味される事物を暗示し、自らとしばしば結びつけられてきた他の観念を精神に対して提示しないような観念は存在しない。符号はその相関する事物を、あるときには形像しやうじやうとして、あるときには結果として、またあるときには原因として暗示するだろう。しかし、そのような類似とか因果とかの関係や、あるいはなんらかの必然的な関係が存在しないときでも、二つの事物はそれらがただ単に共存するというだけで、あるいは二つの観念はそれらがただ単に一緒に知覚されるというだけで、一方が他方を相互に暗示し、意味することができ。そしてその場合の両者の関係は、そのような効果を引起すというだけの結びつきであるがゆえに、全く偶然的な関係である。」(T.V.V. §39) 視覚の観念(眼の第一次の対象)を媒介としてそれとはまったく異なる触覚の観念(眼の第二次の対象)が知覚されるのも、純粹視覚の千変万化する誤り易さが一定の恒常性をもった視知覚へと統一されるのも、バークリにとってはすべてこの符号理論によって十分に説明できる事柄である。我々はこうした諸知覚の符号化の過程を明確な記憶をもたぬ胎児期以来進行させてきており、その過程においてそれら符号化した諸知覚の意味と操作を学び習熟してきているので、晴眼者として育った場合には、視覚の観念と触覚の観念を分離して考えることは、ちょうど母語の聞き慣れた言葉を耳にしてその音と意味とを分離して考えることと同様に、きわめて困難である。モリヌークス問題はそうした学習⁽²⁹⁾経験の過程を明らかにするための思考実験にほかならない。そこで最後に網膜像の逆転問題に即してバークリの議論の総括を行っておこう。

先天性盲人はすでに触覚によって上下の観念を獲得しており、「上下」という言葉を触覚の対象に適用することを学んでいるが、開眼手術後の彼の最初の視覚体験はまったく新しい感覚経験であり、彼は「明るさと色調」の多様な視像をあたかも彼の眼のなかにあるかのように知覚するだけである(N.T.V. §§95, 41, T.V.V. §§44, 45)。したがっ

て彼は、盲人時代に使っていた言葉をその新しい感覚対象に適用できるものかどうか(27) (N.T.V. §96)。しかしその次に彼は、ただじっと見ているのではなく、眼あるいは頭を上下左右に動かして彼の視覚がそれにつれてさまざまに変化するのを観察していくと、それまで無秩序であった視覚の觀念のうちいくつかのまとまりを与えることを学び、かくして視覚の觀念のあるままとまりに対して既知である触覚の觀念のあるままとまりを関係づけて、後者と同じ名前を前者に与えることを学ぶようになるだろう (N.T.V. §§97, 98, 110, T.V.V. §47)。この経験の過程を理解すれば、網膜像の逆転問題は解決される。

というのは、本来は触覚に属する網膜像と視覚に属する視像とは異なったものではあるが、網膜像自身(28)がもつ想像される秩序と視像自身のもつ秩序との間にはある関係が成り立つのであって、それゆえ、網膜像における逆転した上下の秩序と視像における正立した上下の秩序とはなんの矛盾もなく対応し合うからである (N.T.V. §111, T.V.V. §§53, 54, 57)。網膜像の逆転が難問となるのは、網膜上に描かれた本来は触覚に属する頭の像が、視像自身の秩序においては足の像の位置にあるのはなぜかと考えるからであって、その意味で、視覚の対象と触覚の対象を厳密に区別しないからである。したがって我々は、学習^{II}経験を積んだ眼と、開眼手術後の先天性盲人の眼とのちがいを十分心得ておかねばならない。後者にとっては、視覚の諸対象の多様さは必ずしもそれに関係する触覚の諸対象の属性を意味しないので、頭と二本足をその数のちがいによっても識別できないはずである (N.T.V. §108)。しかし前者にとっては、すなわち、視覚と触覚の双方の知覚的秩序を学び両者相互の対応関係を知覚している眼にとっては、頭と二本足は容易に識別できるし、可視的頭と可触的頭、可視的二本足と可触的二本足という両者それぞれの知覚的秩序間の対応関係はもはや決して偶然的なものではない (N.T.V. §142)。それはちょうど、ある言語体系において、ある音

とある文字との対応関係は任意であるが、そうした対応関係が一旦確立されたあとでは、文字のどんな組み合わせがどんな種類の音を表示するかということはもはや任意の事柄ではないのと同様の事情である (N.T.V. § 143)。

感覚の変幻多様さに安定した秩序を与えるのは、それゆえバークリにとっては、広義の感覚の本性ではなく、諸知覚相互の符号的關係にほかならない。⁽⁸⁰⁾ たしかにバークリは、感覚の本性性を常に指摘し、幾何学の対象は、厳密な意味では、可触的延長であるとともに主張し (N.T.V. § 151)、また「触覚をもたぬが視覚能力をもつ非身体的精神」の如きものを想定してその無能さを描いてみせる (N.T.V. §§ 154-6)。しかしバークリの視覚の哲学の構図においては、触覚の本性性はあくまで動物性の次元にとどまるものであって (N.T.V. § 59)、人間の精神性を象徴するものは視覚だけである。「精神」と言い換えられるのは眼だけであり、動物の自己保存にとってきわめて必要な「予知」*foresight* はまさしく見ることの本性に属するものであり、さらに決定的な証拠は、自然の創作者 (神) の普遍的言語を構成するものが視覚の第一次的な対象たる「光」(明るさと色調) 以外のものではないと考えられていることである。その意味ではバークリは、視覚を「もっとも普遍的でもっとも高貴な」感覚として考えるこれまでの伝統に従っているのである。

註

- (1) A. A. Luce, *Berkeley and Malebranche*, 1934, 1967², Oxford, pp. 26-27
- (2) F. Cassirer, *Die Philosophie der Aufklärung*, 1932 中野好之訳『啓蒙主義の哲学』一九六二、紀伊國屋書店、一三二頁
- (3) J. Locke, *An Essay concerning Human Understanding*, 1694², Oxford, 1975, Book II chap. 9 § 8 大槻春彦訳『人間知性論』(一)一九七二、岩波文庫、二〇五頁
- (4) *ibid.* 同前。傍点引用者。

- (12) G. Berkeley, An Essay towards a New Theory of Vision, 1709, in The Works of George Berkeley, vol. 1, ed. by A. A. Luce, Nelson, 1967, §§ 133, 136 (以下本書からの引用は N.T.V. § 133, 136 など本文中に記す)
- (9) Berkeley, The Theory of Vision or Visual Language shewing the immediate Presence and Providence of a Deity Vindicated and Explained, 1733, in The Works, vol. 1, § 15 (以下本書からの引用は T.V.V. § 15 など本文中に記す。邦語名『視覚論弁明』以下『弁明』と表示する)
- (7) A. A. Luce, op. cit. p. 33
- (8) このテーマに関連して、カミナーラー、前掲書、第三章のなかで、J. W. Davis, The Molyneux Problem, in Journal of History of Ideas, vol. 21, 1960; M. J. Morgan, Molyneux's Question, 1977, Cambridge。河野勝彦「眼は何を視るのか——モリヌークス問題をめぐって」、『現代と唯物論』6号(一九八〇)、佐藤和夫「生成する経験と言語——モリヌークス問題の意味と無意味」、『哲学雑誌』有斐閣(一九八二)などの研究がある。
- (9) 名越悦『ハックリ研究』一九六五、刀江書院、一三二—二頁。名越博士は、『新論』の「半非物質論」が『弁明』では「完全非物質論」の立場から修正されている」と解釈する。cf. A. A. Luce, op. cit. p. 28 note 1
- (10) R. J. Brook, Berkeley's Philosophy of Science, 1973, Hague, p. 3。ハックリは「科学の本来の目的は作用因をあはくことではなくて(これは形而上学の目的である)、むしろ自然現象のなかの一定不変性をあはくことである」という科学観に通じる考え方をもっている」とブルックは解釈している。
- (11) Descartes, La Dioptrique, Discours 4^{me}, 1637, Garnier (Œuvres philosophique Tome I), 1963, p. 685。青木靖三・水野和久訳『屈折元学』(デカルト著作集1、一九七三、白水社)一三六—七頁
- (12) ibid. Discours 6^{me}, p. 699。同前、一四七頁。傍点引用者。
- (13) A. A. Luce, op. cit. p. 38, cf. p. 36
- (14) 河野勝彦、前掲論文、一一四頁
- (15) B. Russell, My Philosophical Development, 1959。野田又夫訳『私の哲学の発展』一九六〇、みすず書房、二二頁
- (16) Descartes, op. cit. Discours 4^{me}, pp. 681-2。前掲書一三四頁
- (17) 網膜上の像は逆転してゐると想定されるのに我々がそれを正立しているものとして見るのはなぜかという問題。この問題

は対象の「位置」situation の知覚の問題にかかわるものであるが、ルースによると、バークリはこの「位置」の問題をデカルトから引継いでおり、しかもこのテーマはあとから追加されたものである。A. A. Luce, op. cit. p. 36, N.T.V. An Appendix, T.V.V. § 52

(18) Descartes, op. cit. Discours 6me, pp. 705-9 前掲書一五一一二頁。(三)と(四)は重複しているので整理した。

(19) ibid. p. 713 同前、一五五頁

(20) 邦訳は「わずかしか離れていないもの」(同前)と訳しているが、これでは文意が通じない。

(21) A. A. Luce, op. cit. p. 44

(22) ブルックは、測量的概念としての距離と知覚の対象としての距離とを区別して、バークリがこの両者を、運動感覚も含めた広義の触覚を媒介として関係づけようと試みていると解釈し、測量的問題の議論という側面からバークリの視覚論を吟味して、バークリの議論のあいまいさを指摘している。しかし、バークリの視覚論の本来の目標は測量の問題などではなかったし、またブルックが、モリヌークス問題にかかわる経験的議論を避けていることも物足りない。R. J. Brook, op. cit. chap. II pp. 37-76

(23) 佐藤和夫氏の前掲論文は、「人間の知の構造においては、言語的把握と離れた形で、知覚そのものを問うのは一つの抽象である」(三四頁)として、バークリのモリヌークス問題への解答の「本質的欠陥」をこの点に見出ししているが、モリヌークス問題は「本来的には、かような言語と知覚との弁証法的な関連の中でのみ意味をもつものだ」(四〇頁、傍点引用者)と主張するのは、明らかに「言いすぎ」であると思われる。たしかに言葉は思考の進歩にとって不可欠の道具であり、人間の幼児は言葉を操作しはじめると一歳半頃から類人猿を分離して急速な精神的成長をはじめますが、しかし言葉は思考の原因ではない。外界がすでに意味をもったひとまとまりの事象として知覚されていなければ、その意味やまとまりを担い、操作する符号としての言語は成立してこない。そこにはすでにある程度の認知能力が前提されているのであって、そうした前言語的認知のしくみを吟味することは、抽象であるどころか、経験的な科学の主題でありうる。またバークリの視覚論は、あとで見るように、それ自身としても言語の問題と本質的にかかわっていると思われる。

(24) 河野氏の前掲論文(一一三頁)は、この通説をバークリ独自の結論であると誤解しているように思われる。

(25) ルースは、『新論』の新しさとは視覚と触覚の異質性の議論の新しさであると解釈しているが、やや的是ずれである。A.

A. Luce, *op. cit.* p. 33

- (26) N.T.V. § 92, 144, 159 したがって「バークリも、眼は見ることを学ぶと考えており、この点でコンディヤックやデイドロの考え方とのちがいはないと思われる。
- (27) モリスノックス問題に対するバークリの本来の解答は、その盲人は最初の視覚対象について彼に問いかけられる言葉の意味を理解できないだろう、というものである (N.T.V. § 135)。
- (28) この運動の知覚は触覚に属する (T.V.V. § 47)。
- (29) バークリがこの点を明確に指摘したのは『弁明』のなかである (T.V.V. § 50)。
- (30) したがってバークリの視覚論を、「視覚からの王位、剣奪」(中村雄二郎『共通感覚論』第二章、一九七九、岩波書店)であるとか、「触覚への奉仕者、しもべとしての視覚」(大森莊蔵『新視覚新論』第一章、一九八二、東大出版会)を説くものであるといったように位置づけるのは誤りであるように思える。